

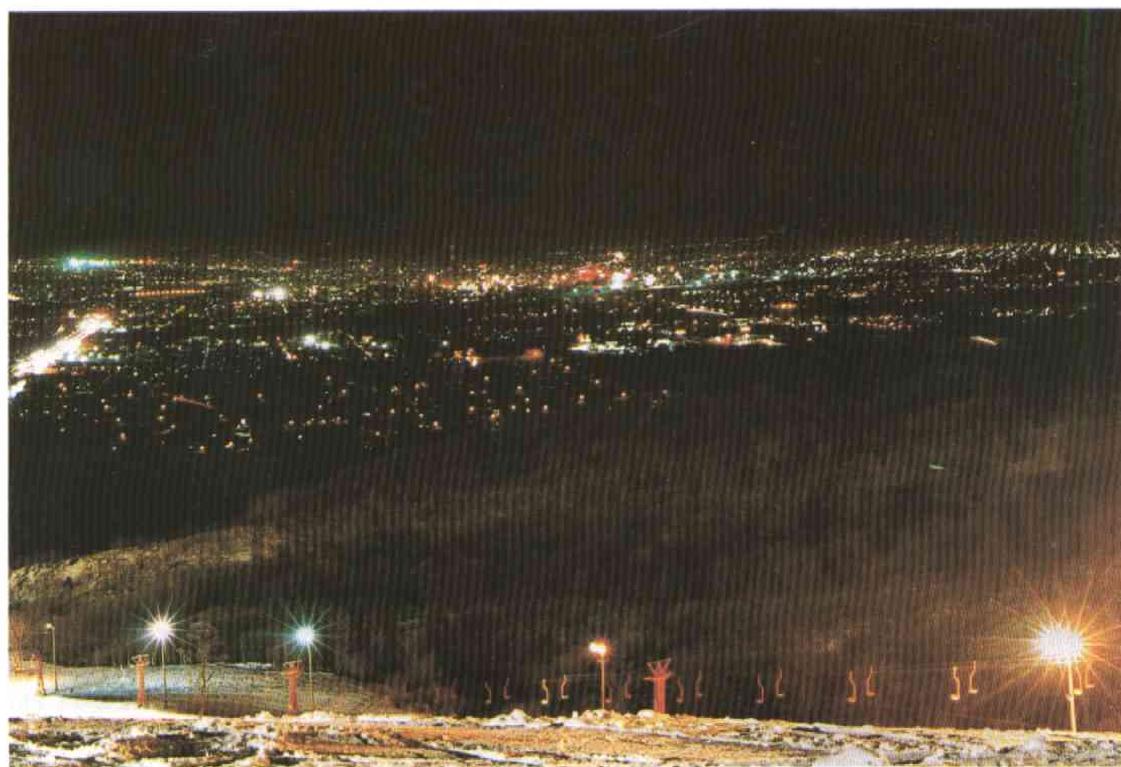
# かぐらおが

第 40 号

昭和59年 5 月 1 日

編集 旭川医科大学  
 厚生補導委員会  
 発行 旭川医科大学教務部学生課

(題字は前学長 山田守英氏)



(写真撮影 学生課 堅田義昭)

サンバレースキー場より旭川市街を望む

随想“人間ほけたくないものだ” 並木 正義… 2	昭和59年度の主な年間行事…………… 7
自然との語り…………… 上口勇次郎… 3	昭和59年度運営組織…………… 7
海外だより	新入生研修 (第1回目) …………… 7
肝臓移植—西ドイツ印象記—江端 英隆… 4	研究室紹介…………… 晴山 雅寛… 7
第6回卒業証書授与式…………… 5	課外活動短信…………… 8
学位記授与式…………… 5	窓外…………… 丸子 基夫… 8
第12回入学式…………… 6	

# 随想“人間ぼけたくないものだ”

並木正義



先日ある会議で、たまたま医学会の大元老の横に座ることになった。昼食の幕の内弁当を食べはじめたころ、その大先生が突然私の弁当にも箸をつけた。刺身にそえてあったワサビのかたまりを箸でつまんでパクリと口に入れた。驚いてその顔を見たが、まったく無表情で、ただ金魚のように口をパクパク動かしてワサビを食べてしまった。それからは自分の弁当を食べながらときどき私のおかずをつまむことを繰り返した。そのつまみ取る動作だけが奇妙に速い。ネクタイのあちこちに刺身の醬油を垂らしている。私はそれを拭いてあげながらつくづく感じた。どんな偉い人でも老化には勝てず、ぼけるものだという。そして他人の幕の内弁当を食べようになったら人間もうおしまいだと思った。

これは人事ではない。自分もやがてそのようになるのかも知れないと思うと、なんともいえない寂しい気持ちがする。いやもう始まりつつあるのではないかと不安になる。

私は昨年までは電話をかけるとき、あらためて電話番号を調べることはまずなかった。一度かけた電話番号はすべて覚えていた。それは忙しいときに電話帳をめくるのがわずらわしいので、独特の方法で記憶にとどめるよう心掛けてきたからである。ところが最近ときどき電話帳を見るようになった。これは記憶力の低下というよりも、むしろ番号を覚えようという意欲がなくなってきたためかも知れない。いずれにしても老化現象に違いないと思うと、いささか物悲しい。

人間50歳代になると、ぼけの傾向が目立ち始める。一般に年齢が進むにつれて老化現象やぼけの程度は高度になるが、その起こり方や程度には個人差がある。70歳代になっても、あまりぼけ症状の出ないしっかりした人もいる。こういう人は、たいてい年をとってもなお頭をよく使い、適度に身体を動かし、張りもち、自分なりに生き甲斐を感じながら生活している。一方、40歳、30歳、ときには20歳代ですでにぼけ症状を現しているものもある。この“若ぼけ”が近年増えつつある。

医学的にぼけの程度を知るための尺度がいくつかあるが、そんな専門的な話をするつもりはない。ここではただ、日常生活においてぼけの状態を知る目安を述べてみよう。まずぼけてくると、結婚披露宴の挨拶などで、まとまりのない話をながくするようになる。挨拶というものは要点を3分くらいで話せばよいものだ。それが15分以上にも及び、さっぱり内容がなく、話が前もどりの話、ぼけの徴候とみてよい。また、ひとりよがりの話を、同じことを繰り返しながら30分もするようになれば、

ぼけも本格的といえる。

会議でいつも居眠りするのぼけの徴候だが、この場合は鑑別診断を要する。睡眠時間を減らして活動的に仕事をしている人も会議のときによく眠る。しかし、会議を利用して少しでも睡眠を補おうとしている人の寝顔は、ぼけの寝顔とおのずから異なる。大事な話題になると不思議と喉が動くし、すぎがない。これに対してぼけ人間の寝顔は子どもっぽく、しまりが無い。そのうえよだれを流したり、会議が終わったのも知らずに肩を叩かれるまで眠っているのはぼけも相当進んでいる証拠だ。ぼけの居眠りは、会議が始まってから眠りに入るまでの時間、つまり入眠時間が早いのも特徴である。たいてい3分以内に眠りにつく。次にぼけが進むと顔付きが幼児化する。

特に80歳前後になるとこれが目立つ。高齢になると心も言動も幼児に帰るためか、顔付きもまた幼児のようになることがしばしばある。テレビの時事放談で長年活躍してきた老人に最近この傾向が明らかにみられる。それにしても人間引け時が大事であると思う。ぼけの症状をさらけ出す前に惜しまれて引退するよう身近な人達で考えてあげるのが真の思いやりというものであろう。他人の幕の内弁当に手を出すようになってからでは遅すぎる。

ぼけを予防し得うる確実な方法・手段はいまだない。

しかし、あまり早くぼけないように、またぼけの程度が少しでも軽くてすむようにという努力は無駄ではない。それは年をとっても絶えず頭を使い、張りをもって生活すること、それに喫煙しないことである。喫煙は脳の動脈硬化を促進し、ヘビースモーカーほどぼけが早く起こり、その程度も強く現れることが知られているからだ。

そのつもりでまわりを見れば、なるほどと思ひあたることもある。この頃タバコをのみながらマンガの本を眺めている大学生をよくみかける。将来が思いやられる図だが、そのなかにはすでに“若ぼけ”の顔付きをしているものがある。少なくとも医師を志す医学生だけは、若いうちからぼけていては困る。もちろん教官もぼけないよう努力しなければならぬ。幸いそのためのよい手本が本学にはある。引き合いに出して恐縮であるが、定年退官後もずっと毎日研究室に通い、実験までしておられる山田前学長のライフスタイルは、その意味からも見習うべきものといえよう。

(内科学第三講座 教授)



## 自然との語らい

上口勇次郎

私の記憶の中で最も古い思い出、それは4・5才頃のものである。それは不思議に小・中学校時代の記憶よりはるかに色鮮かで、なにかそこには時間を越えたバイパスが通っているような気がする。

記憶の中の私が目を覚ましたのは頭上を飛び回るハエのブーン、ブーンという微かな羽音によってであった。どうやら私は湯殿で昼寝をしていたらしい。すぐ脇の土間には大きな五右衛門風呂が置いてあり、かまどには古い櫓木が無造作に放り込まれていた。小さな洗い場には入浴の時に踏み沈めて使う浮蓋が立てかけてあった。窓の外に目を移すと、淡紅色の綿毛を降り積もらせたようなネムの花の間で、カラスアゲハが4・5匹戯れていた。と、中の1匹が窓を通して浮蓋の上に舞い降りた。蝶はおいで、おいでをするようにゆっくり翅を上下させ、その毎にピロードの翅は青く、そして緑に光り輝いた。その美しさは私がそれまで大切にしていた石の宝物の比ではなかった。どうしてもこの宝物を手に入れたと思った。そっと手をのばすと蝶はふわりと体を交し、少し向こうに翅を休める。近づくとまた逃げる。私はいつしか戸外へと蝶を追いかけた。蝶はなぜか幼い私の眼前から一気に飛び去ろうとはしなかった。私は藪の中をどんどん追いかけていった。木イチゴのトゲが腕や足をかきむしった。蝶が何度目かの休息をした時、私は松の小枝を折って蝶を叩き付けた。やっと宝物を手にした時、その輝く衣装は無残に砕け散っていた。蝶は苦しげに細長い口を何度も伸び縮みさせ、やがて動かなくなってしまった。宝物を失った悲しみと擦傷の痛さで私は大声をあげて泣き叫んだ。いや、小さい命を奪い取った事への後悔があったのかも知れない。遠くで母の呼ぶ声がした。藪を出て見ると、真赤な夕焼の中に野良に立つ母のシルエットが黒く滲んで見えた。

私が蝶の採集に熱中するようになったのはこの記憶が原点のように思われる。小・中学校の頃はただひたすら完全無欠の蝶を、より多種類の蝶を求めて野山を歩き回った。その頃、仲間が私に自慢のコレクションを見せてくれた事があった。標本箱の中には私達の田舎では決して採る事の出来ない南国の蝶が沢山展翅されていた。その美しさに目を奪われたが、ほしいとは全く思わなかった。私自身が対峙し、捕虫網に収めたものだけが私にとっての宝物であった。高校から大学へ進むにつれて、収集の興味は蝶の食草や生活史への興味へ、さらに他の動物や野草への興味へと広がっていった。何月頃何処へ行

けばどんな花が咲いており、どんな動物に会えるという事を記した野外ノートが捕虫網に代わって私の供をした。

四季の野山を巡り、今年も去年と同じように皆生きている事を確認しては安心し、フルトナーの爪跡を見ては深い悲しみに襲われた。こんな野外探求も最近ではすっかり減り、テレビの“自然”番組を見て過す事の方が多くなってしまった。番組の構成のうまさにはいつも感心するが、同時にカメラのあまりにも無遠慮な対象への接近に恐怖をおぼえる事もある。逃げ惑う野性動物をヘリコプターの上から写すなどその典型である。また、番組が終るとなにか物足りなさを感じてしまう事も多い。

早春の冷たい風と潮の香の中で岩陰からじっとウミネコを覗いていた時の、暑い日差とむっとする草いきれの中で蝶の吸蜜を観察していた時の、あの充実感がないのである。それは、展覧会で見た絵に感激し、出口で画集を買おうと手に取った時、その絵のあまりの小ささと印刷のまざきさがっかりしてしまった時のあの感じにも似ている。テレビ特有の味付けをされた“カンゾメ”ばかりを食わされては、いつか本物の味を忘れてしまいそうである。

医大創立から10年、大学周辺の自然もずいぶん変わってしまった。以前は春になると講義棟の前の道端にミズバショウやザゼンソウの花が顔を覗かせた。道の向こうの谷地にはエゾサンショウウオやエゾアカガエルの幼生がみられ、時には耳の先の黒いエゾユキウサギが顔を出した。大学の裏手にはエンレイソウ、エゾエンゴサク、カタクリ、ニリンソウなどが咲き乱れ、グランドの脇の木々にはキジバトやモズが巣を造っていた。実験で遅くなって夜道を帰路に着く時、オオジシギの“ズビー、ズビー、ギャギャギャ”という鳴き声に驚かされ、周囲の水田から聞えるアマガエルの大合唱にさわやかな初夏の訪れを感じた。彼らの多くは今は大学周辺から姿を消してしまっただが、少しばかり時間をかけて場所を捜すならまだきっと会う事が出来るだろう。勉学の合い間をぬって訪れる時、君はそこで何を感じるであろうか。咲き誇る草花に自分自身の青春の光を見るだろうか。ワーズワースのように、盛りの季節を過ぎて輝きを失った草原に明日への生命の力を見出すであろうか。それとも……。

(生物学 助教授)

\*海外だより\*

## 肝臓移植——西ドイツ印象記——

江 端 英 隆

北大第一外科医局員の時に、西ドイツ・ボン大学外科にフンボルト奨学生として2年間留学してから、昨年9月で10年たったことなど忘れていた。この留学制度で渡独された方は、本学では整形外科の竹光教授はじめ何人かの先生がいられると聞いているが、実に面倒見のいい財団で知られている。10年たつと数カ月の再留学を認めてくれるというのもその一つで、当教室とボン大学外科移植部門との協同研究の一環として、昨年11月1日より4カ月出張した。小学校6年と2年生の子供を札幌の母に預け、妻と2人で出かけるという調子よく見える渡欧になった。ボンには、受け入れてくれたフンボルト財団の完備したアパートがあり、10年前と部屋こそ違え、同じ住宅に住むことができた。街並はヨーロッパのどこもそうであるように、ボンも10年前とほとんど変わらず、ライン河沿いの散歩道はもちろんのこと、肉屋も、洗濯屋も、バス停の待合室も、そしてアパートの管理人の子供を叱りつける高い調子の声もそのままであった。ただ11年前に着工し、あの進行工合ならいつ出来上がるものやらと噂していた地下鉄が完成していた。生活を始めて約1週間後、それはいつもデモには慣れているはずのボンの住民ですらかつて経験したことのないような騒がしい出来事、パーシングIIの西ドイツ配備の決断が下される日が迫っていた。朝早くから深夜まで、テレビ、ラジオはBundeshaus(連邦議会)での喧々諤々の討論、周辺でのデモと警官との衝突の状況を声高く怒鳴り、それはまるでジュークボックスが突然壊れて、あのやかましい、訳のわからない音楽とやらが急に鳴り出したのに似ていた。テレビに映し出される Bundeshaus 内の風景はまた異様で、髪はぼうぼう、ほとんどセーター姿という出立ちの緑の党の男女が、傍若無人としかいようがないように動きまわっていた。絶対的な経済成長力を誇っていた西ドイツの凋落ぶりは、日本でも時々報道されていたが、考えてもみなかった駅構内における物乞い浮浪者の存在は、やはりそれを示唆していた。生活する日が1カ月を過ぎる頃、動物助手の陽気なイタリア人のマリオが、昔と違って最近では西ドイツで働いていてもあまりメリットがなくなったことを話し、暗にこの程度ならなにも好んで西ドイツで下働きする意味がないと言わんばかりであった。西ドイツマルクが低下し、自国に仕送りしてもレート差による甘い汁が少なくなったという。大学では、研究費の大巾な削減が、研究テーマの的を絞ることを余儀なくさせていた。12月中旬、Kölnの実験外科教室のクリスマスパーティーに行った時、このような席での教授の挨拶としては異例で、来年はいろいろと辛抱してもらわなければならないと長

々と話したし、フンボルト財団のクリスマス、コンサートでは、今までのように奨学生を受け入れることができないという言訳を、沢山の数字を並べながら話すのを聞いた。Düsseldorf より北に約1時間の炭鉱町 Bottrop で、仲間と2人で2年半前に開業した整形外科医の友人は、医師過剰による開業医の難かしさを、まるで日本での話しかと思えるように語った。

今回の出張の目的の一つは、私の専門領域の臓器、組織移植、とくにヨーロッパにおける肝臓移植施設を訪問することであった。昨年3月末で、世界の代表的4施設にて行われた肝臓移植総数は540を数えていた。1980年以降の生存率の向上は目覚ましく、アメリカ、ピッツバーグ大学の Starzl らは、1年生存率が約70%になったことを報告していた。11月末に、西ドイツで最も多く肝臓移植を行っているハノーバー大学外科を訪れた時、ICUには107例目(術後3日目)と108例目(術後1日目)の患者がいた。術後3日目の、45才前後で小柄なイタリア人の男は、すでに経口摂取ができ排便もあったことが、自分を手術した外科医の腕がいかによいかを自慢するかのようには話して聞かせた。案内してくれた内科医が「肝臓のどんな病気で移植されたのか。」と聞いたところ、彼は「肝硬変に肝癌を合併しており、そのままでは6カ月もたないといわれたので、移植手術を受けたのです。」と普通の調子で語っていた。年が明けて1月末、幸運にもボン大学外科で肝臓移植手術の手伝いをする機会が巡ってきた。患者は、46才の肝両葉に多発する胆管細胞癌の女性で、移植肝はベルリンで交通事故で脳死状態となった47才の男であった。独立した機関として各大学にある移植情報センターは、その地域の病院における脳死状態患者の血液型、HLA タイピングと摘出可能臓器をよく把握しており、ヨーロッパ中と密接に連絡を取っていた。ベルリンのこの肝臓は、英国ケンブリッジ大学主任外科医 Calne と、ボン大学外科の T. S. Lie との取合になった。47才の肝臓はやや年をとり過ぎており、不満はあったが、英国が下りたことでボン大学のものになった。ベルリンで摘出され、灌流された灰白色の肝臓は、氷の浮かぶ生食に浸されたままビニール袋に包まれ、アイスボックス姿で、普通便のプリティッシュェアに乗り、夜10時頃、ケルン、ボン空港に着いた。この時には、すでにボン大学外科の手術室では煌々とした無影灯の下、患者の肝臓は4人の外科医が汗だくになりながら、しかし慎重に摘出にかかっていた。朝6時、手術は無事終了した。約8時間経過していた。手術部控室では患護婦を含む約10人が、静かに乾杯のビールを飲んでいて、ベル

リンで交通事故にあった47才の男の肝臓は、血行が完全に断たれてから、ボンの患者の腹の中でピンク色に蘇えるまで約10時間、ほとんどの時間をひっそりとビニール袋に入ったまま、手術部の片隅に置かれてあった。現在12時間までの肝保存は安全であることが知られているが、それ以上では何らの保証もない。我国でも、カリフォルニアから保存、空輸された腎臓のお陰で、日本人の約150名が元気に生活している。片側一方交通の輸入であるが、脳死状態での臓器摘出などともないという我国の現状は、アメリカからもらう分にはなんでもないという身勝手さである。肝臓には12時間の壁があるため、成田空港内に手術室を設けないことにはどうにもならない。

肝硬変合併肝臓で、移植適応と成りうる55才までに死亡する人は、1981年の我国人口動態統計によると約5000人いる。現在の肝切除率は26%であるから、これを除いても1年間3000人はいることになる。しかし、患者は「肝臓で、あなたはもう6カ月以上は生きられない。」との医師の告知を受けて立ち、さらに他人の肝臓で1年あるいは3年生存者として残ることに賭け、移植手術を受ける決断を自らしなければならぬ。

前記したボンで移植された患者は、1週間後、少ない合併症の一つである門脈血栓症のため死亡した。こんなに早い死は、胃痛の術後にもあると言ってしまえばそれまでだが、あまりにも患者の精神力を要求する肝移植術は、他人の肝臓などで長生きしたくないという人が多いとしても不思議ではない。

(第二外科 講師)

## 第6回卒業証書授与式

第6回卒業証書授与式は3月24日(土)午前10時30分から本学体育館において挙行された。

式では在学生らの弦楽合奏同好会がバッセルベルのカノン他を演奏する中、卒業生95名(内女子学生15名)は学長から1人1人卒業証書を手渡された。続いて学長から「隣人愛を失わず、これからは人間の存在そのことに思いをいたし、生涯、自分の医学概論を書き続けて下さい」との告辞があり感慨無量であった。

式終了後は、本学学生食堂で祝賀会が和やかな雰囲気のうちに行われ、卒業生にとって大学生活最後の1日が終わった。(学生課)



## 学位記授与式

3月24日(土)午前9時30分から本学第1会議室において、医学研究科を修了した14名に対し医学博士の学位が授与された。14名の氏名・専攻・学位論文題目は次のとおりです。



氏名	専攻	学位論文題目
坂田 宏	生体防御機構系 病原微生物学部門	抗生剤投与による小児腸内細菌叢の変動に関する研究
古井 秀典	生体情報調節系 代謝・内分泌学部門	ヒト末梢リンパ球幼若化反応に関与するT細胞表面抗原の解析
長谷部直幸	生体情報調節系 循環・呼吸動態学部門	実験的微小肺塞栓における初期昇圧応答に関する研究 ——筋原性因子の検討——
橋本 博	生体情報調節系 神経科学部門	膀胱癌と基底膜特異蛋白 laminin
坂本 尚志	生体情報調節系 神経科学部門	Long-lasting excitability changes of soleus alphamotoneuron induced by the midpontine stimulation in the decerebrate and standing cat. (脊髄アルファ運動細胞にみられる膜電位の形成性(plasticity))
丹野 正隆	生体防御機構系 免疫学部門	H L A - D R 抗原及びそれらの超特異性抗原とは異なるヒトIa様抗原の免疫化学的解析
熱田 裕司	生体情報調節系 神経科学部門	Identification and discharge properties of neuronal elements constituting stretch reflex loop in the acute decerebrate, standing cat. (除脳標本における反射直立姿勢と伸張反射弓の動態)
和泉 裕一	細胞・器官系 腫瘍学部門	In-vitro fibrin preclotting 法の基礎的臨床的研究
平田 哲	細胞・器官系 腫瘍学部門	MLC反応に関与するヒトClass II 抗原の役割に関する研究
滝山 義之	生体情報調節系 代謝・内分泌学部門	Lysolecithin 誘発急性壊死性肺炎ラットに関する研究—その自然経過と薬剤の生存率に及ぼす影響—
宮田 昌伸	生体情報調節系 神経科学部門	排尿における仙髄及び橋の機能的役割に関する研究
金谷 健史	生体情報調節系 神経科学部門	中脳ネコ歩行標本の制御歩行時における外側前庭神経核細胞の機能的役割
相馬 光宏	生体情報調節系 情動科学部門	Ultrastructure of the Absorptive Cells in the Small Intestine of the Rat during starvation (絶食時におけるラット小腸吸収上皮細胞の微細構造に関する研究)
矢野 公一	生体防御機構系 病原微生物学	下垂体性小人症における血清ソマトメジン活性—Chick Embryoの胸軟骨片を用いるBioassay法の検討—

(学生課)

## 第12回入学式

昭和59年度入学式は、4月13日(金)午前10時から、本学体育館において挙行された。今年度新しく本学の学生となった120名(内女子学生21名)はさまざまな期待を胸に秘め式に参列し、学長の式辞、又新入生を代表して青木正君が「学則その他の規程を遵守するとともに、学生としての本分に従って勉学に励み、成業を期すことを誓います。」と元気に入学誓約書を読み上げた。式終了後は講義室において学年担当、図書課、学生課からのガイダンスを受け、大学生活への第1歩を踏み出した。

(学生課)



昭和59年度入学者名簿

## 昭和59年度の主な年間行事

今年度の主な年間行事は次のとおりです。

4月	13日	第12回入学式
4月23日～24日		新入生研修(第1回目)
6月14日～17日		第10回医大祭
9月	5日	体育大会
9月	26日	解剖体慰霊式
10月29日～11月2日		新入生研修(第2回目)
12月		スキー教室
3月	25日	第7回卒業式

(学生課)

## 昭和59年度運営組織

(教務委員会委員)

委員長	石井 兼央 (副学長)
副委員長	星野 了介 (図書館長)
委員	内田 倅喜 丸子 基夫
	美甘 和哉 小野 一幸
	藤沢 仁 石橋 宏
	並木 正義 大河原 章
	天羽 一夫

(厚生補導委員会委員)

委員長	石井 兼央 (副学長)
副委員長	岩瀬 次郎
委員	安田 博 岡田 雅勝
	松嶋 少二 山村晃太郎
	土井 陸雄 小川 秀道
	坂井 英一 関口 定美

(学生課)

## 新入生研修(第1回目)

昭和59年度第1回目の新入生研修は参加者相互のコミュニケーションを図ることを目的として、4月23日(月)・24日(火)の両日午後5時から午後7時まで本学、第1セミナー室・第2セミナー室・和室・一般教育会議室で行われた。各室、教官と共に自己紹介及び懇談会を通じて、親睦を深めていた。

(学生課)



## 研究室紹介

■ 物理学 ■

晴山 雅寛

物理研究室の歴史は、昭和48年の開校前より始まっていた。教授発令予定者の星野は北大に籍を置く傍ら、教育棟の設計に参画すると共に、第一期生を迎える(?)ための入試問題作成を行っていた。昭和49年4月に講師として赴任することになる晴山もこれら一部を協力していた。正式な研究室は昭和49年5月の現校舎への移転を機に誕生したと云ってよいであろう。この年6月教務職員として安濃を迎え、教授1、講師(現助教)1、教務職員1及び事務職員1からなる物理教室(教室と呼ぶにはあまりにも小規模であるが)の陣容が整った。全員が健康でこの10年を過ごしてきた事を喜ぶべきなのか。はたまた、小規模のまま、ただ馬齢を加えてきた事を悲しむべきなのか。現在迄、構成に大きな変化はない。

各人の紹介をする。教授の星野は教務職員の安濃と共に、物性研究の分野である微粒子の光吸収に関する研究を続けている。エレクトロニクス関係にも造詣が深く、卓越した知識をもとに研究を指導している。又、各委員会に於いても、器械センターの充実ぶりを見るまでもなく研究体制の充実を計るべく活躍している。大学運営では、図書館長として重責を果している。助教授の晴山は、理論物理学の中の素粒子理論の研究を行っている。この分野は進歩の速度が急激であり、時折(しょっ中?)北大・京大等へ出かけ、共同研究や新しい知識の仕入れを行っている。最近、ここ数年間の研究の総合報告が公にされた。教務職員の安濃は、微粒子の光吸収の実験面をほとんど一人でこなし、その実験テクニックは他大学の研究者からも賞賛されている。学生教育に於いても、実験の指導を懇切、丁寧にそして時にはきびしく行ってくれており、著者なぞ大いに感謝している。最後になるが、事務職員として源長嬢がおり、各人が快適な教育及び、研究活動ができる様に裏方として務めてくれており、皆大いに感謝している。彼女は誠心誠意、善意の人である。

教育面では、1年生、2年生の講義・実験を3人で分担し行っている。又、大学院生に対しても星野と晴山が担当している。これが物理研究室の様子である。教室の独自の行事等は小世帯のこともあり、なにも行っていない。故に飲む機会の少ない健全研究室である。

以上、研究室の概要を述べたが、最後に一言つけ加えるならば、星野教授が今年度をもって定年退官される予定であり、大樹の陰でぬくぬくと風を避けながら過してきた著者達にとって、来年度は今までにない試練の年になることが予想され、今から不安を禁じえないのである。

(物理学 助教授)

## 課外活動短信

第26回東日本医科学生総合体育大会（冬季スキー部門）

場～場 秋田県田沢湖スキー場

男子 優勝(旭医大)・2位(北大)・3位(札医大)

女子 優勝(秋田大)・2位(群馬大・東京女子医)・  
4位(旭医大)

(男子) 滑降 2位岸(3年)・大回転 3位横山(3年)・  
回転 1位木ノ内(3年) 2位 松坂(4年) 3位  
西村(5年)・8km 1位石原(4年) 3位 石井(4年)  
15km 1位石原(4年) 3位 石井(4年)・リレー  
1位(石原・石井・岡井・妻倉)

(女子) 3km 2位 赤平(6年)・5km 2位 赤平(6年)  
3位 信本(2年)



### Selbst-MordよりもFrei-Todを

誰もが嫌いなように僕はこの自殺なる語が嫌いである。新聞雑誌に見える文字としても厭だし、会話やラジオで聞かれる音としても厭なものだ。「殺す」の語にまつわるイメージを嫌うからだろうが、とりわけジサツという音がよくない。日本語でこの発音をもつ言葉を広辞苑でひいてみると、他には寺刹(＝寺院)ひとつのみである。ところが今の世の中ではなんと多くこの語に出合うことだろう。倒産、銀行強盗、校内暴力、落ちこぼれ、殆んどビョーキ、などの悪い語と同じくらいの頻度だ。当該の事件が多くあるからこの語もよく出るので、それがそんなに厭なら自殺事件が減るようにお前も社会的に努力しなさい、というのが道理である。だが僕には、駈け込み寺を山里に作る金も人徳もないし、病氣や失意でノイローゼに陥った人を治せる能力もないと自認せざるをえない。どだい、自分の子がそうした絶望状態にあるのを幾分かは解っていないが、「身から出た錆だ、死んだら骨は拾ってやる。」と心の中で突放していた酷薄な親なのだ。さいわい家出ぐらいで済んだからよかったけど。

じゃお前はいったい、これまで一度も自ら死のうと想ったことはないのか、死んだほうが良いと思うほど苦しんだことはないのか、と問われるならば、厭世観にとり

つかれたことはあるが半年位で抜け出せた、と答えよう。多分それは、僕が戦争末期に二回ほど空爆などで死線をさまよった経験をもつ、死に対して恐れを感じない野蛮人であるのと、割に健康と幸運と友人に恵まれた外向的で要領のいい男だからであろう。過大な責任を負うのをうまく避け、常に山野に遊び芸術とたわむれ、苦難が深まれば無の哲学と後悔の涙に逃げこむ本能をそなえて、58才まで生きのびたのである。

それでは聞くが、お前はそもそも自殺または自決、または自裁(ドイツ語でいうとFreitodか?)という行為そのものをどう評価しているか。言葉の好き嫌いでなく、あの行為は無価値か、愚行なのか。自殺者は弱虫のバカ者で、情無い逃避者でしかないと言うのか。

小学生のそれは全くの誤りか小児病的反抗であるから親としては交通事故と同じとみて諦めるしかない。青少年のそれは激情のなせる業であることが多く、生命力過剰として我々オジンはその強烈な目標追求意志に脱帽せざるをえない。生甲斐をもっとも痛切に求めるのは今も昔も若い世代なのであり、その挫折による自決はもっとも悲しく惜むべきものであろう。その原因が失恋であろうと落第であろうと政治思想の為だろうと。人間関係で責められてとか、借金や仕事の不調とかで死にたくなったら、まず蒸発して「一切無」の、裸の、虫の存在になるのがよかろう。最近死んだ元全学連委員長の後半生23年は、変な表現だが、「も一度花を咲かそう」などと悠張らなかつた潔い男の生であった。ニーチェは狂う5年前にSelbstmordのことを、「忍び寄る死神ではなく、私が望んだからやって来る自由なる死」だとツアラツストラに言わせている。僕も、せめて言葉だけでも、自裁か自決としたい。新潟三区では野坂昭如のよりどころとした言葉は一敗したが、この件に関して言えば、言葉の改めはもっと力があると僕は信ずる。

(ドイツ語 教授)